

アーカイブ 通信 No.11

No.11

2017.11.1

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
◆tel: 042-540-1663 / fax: 540-1687 (事務局)
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)
E-mail: simin-siryo@nifty.com
www.c-archive.jp
〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)
◆正会員 1口 6000円、賛助会員 1口 3000円 / 年
(30歳以下：正会員 4000円、賛助会員 2000円 / 年)
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ

新代表ご挨拶

ひびびの「思い」と「行動」の 歴史を次の世代へ

町村敬志 (新代表)



「ネットワーク・市民アーカイブ」は、会員をはじめ、多くの団体・個人の皆様によって支えられています。

実務上は、毎月第3金曜日開催する拡大運営委員会と年1回の総会、運営委員の中心で分担する企画部・広報部・資料部・事務局：それぞれの合議によって活動内容を決定し、文字通り、協働で運営してきました。2014年に開館した「市民アーカイブ多摩」もこうした態勢を基に、資料整理ボランティアとともに運営しています。

当会発足時から丸3年間、杉山弘が代表を担当してきました。2017年度総会で12人の運営委員が承認され、7月の拡大運営委員会で、互選により私が今年度の代表を務めさせていただくことになりました。

杉山前代表は、広く市民生活・運動のミニコミ資料の制作に携わり、アーカイブの運営に専門として通曉してお

り、研究畑を歩んできた私などのように貢献できるのか、心もとなく感じられるかもしれません。当会の前身である「市民活動資料・情報センターをつくる会」発足時から関わっていることもあり、微力ではありますが、尽力したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

◇「場所」をもつことの大切さ

「市民アーカイブ多摩」は開館4年目を迎え、当初の立ち上げ期を次第に通過しつつあります。小さくはありますが、市民自身による市民の資料館としての態勢が少しずつ整ってきました。と同時に、さまざまな市民が資料を紹介して結び合う「場」としての役割を、通常開館や緑蔭トークなどの企画を通じ、徐々に積み重ねられるようになったことは、とてもうれしいことでした。「場所」をもつことは、やはり大切ですね。開館に際し、建物利用の機会をご提供くださった岸中友子さんのご冥福

を改めてお祈り申し上げますとともに、NPO法人グリーンサンクチュアリ悠の皆様の引き続きの場所提供のご厚意に心から感謝を申し上げます。

◇遠くの目標・近くの課題

せっかくの機会ですので、運営委員会でたびたび話題に上るものの、日常業務に埋もれ、なかなか議論できない課題や夢などをご紹介します。皆様から新たなお知恵をいただききっかけとしたいと思います。

第一に貴重な資料をどのように利用・活用していくか。市民の知恵や実践がまった資料から何を読み解き、何を学ぶか。この点は運営委員会でも検討中です。法政大学大原社会問題研究所に移管された2002年以前の資料も含め、さまざまな立場から、新しい可能性を見つけ出していきたいと思っております。

第二に、つながりの「場」としての可能性は本館の大き

な魅力となりつつあります。インターネットの時代だからこそ逆に、「現物」の資料を紹介した対面的なネットワークの場は貴重です。この限られた空間をどう生かしていくか、検討したいところです。

第三に、こうした「場」を守っていくためにも、まずは資料館としての基盤がしっかりと固まっていなければなりません。「資料センターの会」の活動が始まった頃、「資料」問題は地味なテーマでした。「アーカイブ」という名称も迷いのなかで思い切ったつけたものでした。「地味さ」はいまも変わりありません。しかし「資料」という課題を取り巻く世の中の状況は幾分変わったようにも感じます。この「風」をうまく読み解きながら、私たちの力に変えていきたいと思っております。

第四に、市民のための資料館として持続していくためにも、その使命を節目ごとに再確認していくことが大切となるでしょう。現在、多くの市民活動資料が散逸の危機を迎えています。しかし資料館の収容力には限界があります。資料は作られた場所に残ることと価値を増します。市民アーカイブ多摩の経験は、そ

うした新たな場所づくりの試みにとつても、何かの役に立つのではないのでしょうか。小さな資料館だから共有できる知恵がありそうです。

◇資料の「向こう」に人がいる

筆者は、社会学を学ぶ学生・研究者として、1980年代から、住民運動、環境運動、反核運動などについて現場で多くの方のお話をうかがい、そこ

で個人的なミニコミやチラシが作られるのを目にしてきました。90年代前半には、増加する外国人住民がつくるミニコミ（エスニック・メディア）を収集し、作り手を各地に訪ねる調査を重ねていました。これらを通じ、いつも感じていたこと、それは、資料の向こうには常に思いをもった人がいる、ということでした。

アーカイブとは、資料を伝えるだけでなく、その向こうにいるさまざまな人の思いを、次の世代に伝えていく役割を担っているのだと思います。市民アーカイブ多摩も、そうした役割を分担できるように願い、活動していきます。

（まちむら・たかし|| ネットワーク・市民アーカイブ代表、一橋大学）

第3期 りよくいん 緑蔭トーク報告

第2回 7月22日

「市民の学びの拠点はどこに？」

増沢 航（八王子市史編集専門部会近現代部会専門調査員）

四季折々に彩りの変わる樹木に囲まれた市民アーカイブ多摩では、今年度も緑蔭トークを開催しています。今号では第2回と第3回の報告を掲載します。

八王子市は面積・人口とも多摩地域で随一の規模を誇る。1950年に8万人だった人口は、周辺町村との合併やベッドタウン化による新住民の流入によって増加の一途をたどり、2000年代には50万人を越えるに至った。

◆遅れる社会教育施設整備

八王子市民の学びの拠点の変遷の例として、まず公民館を挙げる。1949年の社会教育法整備後、八王子市でも公民館

設立の気運が高まり、62年に市民会館に併設する形で初めて公民館が開設された。規模としては資料室、会議室2部屋、講習室のみだったが、団体への情報提供のほか、多様な講演・講習会・研究会を開催していた。しかし、圧倒的に規模が足りないという市民の声があがる。小学校を利用した移動公民館なども展開したが、焼け石に水のような状態だった。74年に出張所建て替えの際に横山分館が開設された後は、96年に南大沢

総合センター内に南大沢公民館、97年に川口やまゆり館内に川口公民館がようやく開館した。

図書館は、敗戦から間もなく、鶴川村で農村図書館を運営していた浪江度から、市内の運動家や青年会らに本を貸し出し、部落文庫が開設されるようになった。八王子市立図書館は空襲前に避難していた蔵書を元に、敗戦直後の45年には多摩地域で一番早く開館している。しかし、最初に開設した国民学校を皮切りに小学校や寺院を転々とし、55年からは都へ移管。広い市域をカバーするため、移動図書館が整備されたが、それでも市民の要望には応えきれなかった。各地で図書館開設運動が独自に立ち上がったいき、個人や自治会による子

シリーズ“現場”を訪ねる②

浪江度の思想を 場と資料から辿る

—旧「私立南多摩農村図書館」を鶴川に訪ねて—

77年前の昭和恐慌の時代に、地主に抵抗する小作農民を支援しようと、南多摩郡鶴川村にやってきた浪江度。支援活動は、治安維持法により挫折を余儀なくされますが、浪江は、やがて鶴川村に「私立南多摩農村図書館」を開設、図書館から民主主義の礎を築こうとしたのです。今回の「シリーズ“現場”を訪ねる」では、現存する旧「私立南多摩農村図書館」を訪ね、ご家族からお話を伺った後、町田市立自由民権資料館に移動し、同館が保管する浪江度関係資料群のうち、治安維持法違反から図書館設立にかかわる時期の資料を閲覧・調査します。

- ・日時：2017年11月23日(木・休)午前10時～午後4時
- ・集合：午前10時に小田急線「鶴川駅」北口改札
- ・訪問先：旧私立南多摩農村図書館、町田市立自由民権資料館
- ・案内：野沢陽子さん(浪江度さん長女)、杉山弘(当会運営委員、町田市立自由民権資料館学芸担当)
- ・資料代：500円(学生無料) ・要事前申込み
- ・申込み先：ネットワーク・市民アーカイブ tel:042-540-1663
E-mail: simin-siryo@nifty.com

ども文庫が生まれ、地域住民による各旧村の支所などを利用した地区図書館が次々と開設された。85年によくやく八王子市立中央図書館が開館し、90年代後半以降になると、公民館などと併設する形で新たに4館2分室が新設された。

◆コミュニティ施策の推進

敗戦直後、教育委員会などが主導していた婦人学級や成年学級も、やがて参加者各々が自主的な勉強会を立ち上げるようになる。70年代に入ると福祉・教育・消費者問題などにも向き合うようになり、八王子市



では67年に婦人センター、77年には消費者センターが開館している。

ただ、70年代に入っても社会教育施設の不足は深刻なものだった。さらに中心部のみ施設整備が充実しているといった地域間の差や、65年頃からベツドタウンとして移り住んできた新住民とかつてから市内に在住していた旧住民の差という問題も顕在化してくる。こうした差を埋める方策として

八王子市では78年より「コミュニティ」という言葉を多用するようになり、それを具現化する施設として83年に「市民センター」を開設する。会議室、体育館、図書室、音楽室、料理室を備えたこの施設には、地域住民が建設計画の策定にかかわり、その後の運営も担う仕組みをとっている。84年にはこうしたコミュニティ施設を管理する「コミュニティ振興会」も立ち上がる。

その後、99年に生涯学習センターが開館し、中央公民館と横山分館が機能移転した。07年には公民館条例が廃止、市の公民館は生涯学習センターに統合される。そして公民館的な施設として作られたコミュニティセンターが現在18館ある。

◆どこに重点を置くか
八王子市の場合、90年代になつて特に顕著になったが、多くの機能をもたせた複合施設

の中に学びの拠点も含まれるようになった。ただ、この場合本来あるべき明確な目的を見失ってしまった。また、たとえば図書館であれば、司書のような専門職がいなければ、地域による差が生じる可能性がある。今回は戦後八王子の事例をたどってみたが、他の地域の実態(経験)なども参照しつつ、さらなる比較検討が必要であろう。(増沢・記)

◆参加者の感想から
・非常に真面目だが、聞き易かった。同時に話し易い雰囲気の中で、来た甲斐がありました。
・散らばりそうな資料がきちんと保存されていて驚くとともに大切なことだと思った。増沢さんの八王子の話は住民としていろいろなことに気づかされました。
・各地域から関心のある方が参加され、よい学習会だった。各自からのひとことも大切な情報源と実感した。

第3回 9月23日

「手作りパンの店・ポムの20年」

中野 政子さん(立川市幸町・ポム)

◆家族で一緒に育ちたい

私と家族で、立川市幸町(※市民アーカイブ多摩のすぐ近く)にパン屋を開いて20年が過ぎました。人は、「バラがきれいな黄色い家のパン屋」と呼びます。私には1973年生まれの息子と、75年生まれの娘がいますが、2人とも発育が遅れがちで、一生懸命成長を促しながら生活していました。息子は立川市立幸小学校・四中、小松原高校を皆勤で卒業し、西東京調理師専門学校に進学して、調理師になりました。就職となると難しく、長続きでき

卒業した後、国際製菓専門学校に進学しました。卒業間近に就職ということになり、「家族みんなで力を合わせて育ちたいのですが、パン屋でもできないでしょうか?」と担任の先生に相談すると、「できますよ。あなたがこの学校へいらつしやい」と勧められました。

◆51歳で開業を決意
夫も賛成してくれて、私を通うことになりました。午前中は東大和療育センターでパートをし、

◆どこに重点を置くか
八王子市の場合、90年代になつて特に顕著になったが、多くの機能をもたせた複合施設

◆家族みんなで持ち場につく
パン屋は、朝5時から夜の7時までの立ち仕事で、思った以上に重労働です。繁盛はしていましたが、私の気持ちの子どもたちに伝わらず、忙しさのあまり皆がイライラしていた時期もありました。
8年経った時、定年になった夫の協力が得られることになりました。夫はそれまでの私のやり方を変えて、「仕事をマニュアル化していつも高品質の同一商品を作ること」「清潔への細心の注意」等、企業人



夫は賛成してくれて、私を通うことになりました。午前中は東大和療育センターでパートをし、



見て歩きました。製菓学校の友だちや先生方も協力してくれました。そして、いよいよオープンしたお店は何の宣伝もしないのに大繁盛。パンを

の目から店を変えていきまし
た。『ボム』は家族で回せるよう
になり、朝5時から子どもたち
も私たちも各々の持ち場につ
くのです。

夫が参加する前は取材は
断っていたのですが、載せてい
ただくと反応が大きく、地域情
報誌『多摩リビング』の三多摩
パンコンクールで1位になっ
たこともありました。

◆地域の人の出会い、助けられ、 育てられた楽しい20年

私たちは地域のつながりを
大切にしてきました。オープ
ン当初の20年前から幸小学校
の2、3年生の町探検の授業の
お手伝いをしています。その
小学生たちと一緒にパン屋も
育った感じがします。

近所の方々、自治会・子供会
の集会、保育園や学童保育所の

軽食、老人ホーム・小学校や中
学校での行事食…みんなパン
を注文してくれました。そん
なことでパン屋は育ち、パン屋
になることが出来ました。ま
た、先日逝去された岸中友子さ
んからは、いつも大きなエール
をいただきました。パンの技
術を教えていただいた国際製
菓専門学校の理事もさせてい
ただいています。人が好きな

私は、多くの人と出会い、助け
助けられ、とても楽しいパン屋
の20年を送ることができまし
た。(記録・佐藤啓子)

【参加者の感想から】

・お話に感動致しました。涙が
あふれました。素晴らしい生
き方、素敵です。
・中野さんとは、若い時から
のお友だちで、いつもがんばっ

ているなあと感心していま
す。お互い若くはないので身
体だけは気をつけてほしいと
思っています。
・お話が素晴らしく、心にしみ
ました。市民アーカイブ多摩
のことも気になりました。時々
通りすぎていました。自然豊
かな雰囲気が好きでした。来
館できて幸せでした。

私と活動 市民資料 9

各地の活動の資料に励まされながら

～市民活動サービスコーナーから、市民アーカイブ多摩へ

山口ゆみ(調布市公民館を考える市民の会)



□「貴重」と言ってくれる人

「こういうものが貴重なん
ですよ」と言って入院中の
故奥田泰弘さん(中央大学教
授)は、私が差し出した『調布
市公民館を考える市民の会会
報』を受け取りました。それ
から、3か月後に亡くなられ
て、活動の発足から支えてく
ださった奥田氏の言葉は、今
も心に残っています。

1993年、行革の嵐が吹
き荒れるなか、公民館存続の
一心で市民運動を始めた私た
ちは、何をどのように行っ
たら良いのか暗中模索のなかで

故奥田氏に助言を受けながら
一歩一歩、歩んでいました。

その折に、元都立多摩社会
教育会館市民活動サービス
コーナーの資料室を紹介され
ました。そこには、他市の市民
活動や運動の情報、資料など
がありました。いろいろな市
民活動の通信や会報などを読
み、それぞれの地域でこんな
にも生き生きと真摯に活動を
する市民がいることを知り、
励まされました。同時に、担
当職員が居て相談ができたこ
とは活動の力になりました。

□情報誌から感じる活動の広がり

2002年に市民活動サー
ビスコーナーが事業廃止され
た後も、コーナーの元職員や
利用者の方が中心になり、
発行され続けているミニコミ
誌『市民活動のひろば』(年10
回)は、常に市民の目線で書か
れていて共感させられると共
に、同じ多摩地域でこんな活
動をしているのだと、いつも
発見や驚きがあります。ま
た、情報誌には、この先1か月
に催される市民団体の集会な
どが掲載され、それぞれの生
き生きとした活動からは、市

民活動の広がりを感じます。

□暖かさを感じた交流会

さまざまな市民団体がご自
身の活動を話していた「市民
活動おはなし箱」。そして現
在同じ場所で行われている
「緑陰トーク」は、棚いっばい
に市民活動のファイルが並
び、井戸端のような雰囲気
で市民活動をされている方
のお話を聞ける機会になっ
ています。同時に緑豊かなグ
リーンサンクチュアリ悠の敷
地内でもあります。私が参加
した不登校の子どもたちにつ
いて話す会の際は、それぞれ
の子育てのことができ、肩
を話しかけることができ、

立ち上げた頃だったことも
あり、とても印象深い学習
会でした。

□作り手と読み手をつなぐ

思い出したことを散漫に書
きましたが、市民アーカイブ
多摩のパンフレットには「市
民活動資料の収集・保存、
公開をして、さまざまな資料
を共有すること、市民の思
いと行動の交流拠点になる
ように」とあります。今、貴重
な資料の散逸が大きな問題に
なっています。
過去と未来を見つめて、今
を考えるために、市民活動資
料の作り手と読み手をつな
げる「市民アーカイブ多摩」の
活動を一会員として担ってい
ます。

(やまぐち・ゆみ 会員)

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信ミニコミを、発行者の方に紹介していただきます。

共働学会だより

社会福祉法人共働学会は、「障害者が障害者としてしか生きられないことを克服する」ことを基本理念に活動している。障害者施設です。ここには、障害の程度や内容はもちろん、判定では「障害者」にはならない人も一緒に、作業をしたり、日々の生活を楽しんでいたり、日々の生活を楽しくしたりしています。大人の施設で、18歳〜83歳までの方が在籍しています。

できるだけ自由に、地域での生活を楽しんでいるのですが、表面だけ見ると、「怖い」「変な人」などと思われれることもしばしばです。そんな中で、私たちのことをわかって欲しいという願いから、『共働学会だより』が生



・創刊 1991年、850部、A4判 12頁、モノクロ(一部カラー)、年 12 回発行
・賛助会員：年 3000 円 / 口
・連絡先：tel:042-737-7676 / E-Mail: kyoudougakusya@pop13.odn.ne.jp
・当館所蔵：2002.1～2017.10月号
▽2017.10月号(320)号内容=「私の夢」紹介、大下勝正さんとの座談会報告 4、夕涼み会に参加して、部活の余暇の過ごし方、地域交流カレンダー、他。

まれました。創刊は1991年1月、ほぼ月1回発行し、今月で通算320号になりました。

現在、『共働学会だより』の編集部は、車椅子を利用する人が5人、知的障害の人が1人、ボランティアが2人、職員が2人です。自らを「変酋長」と名乗る編集長の千野さんは、重度の障害を持つ車椅子利用者です。カットを担当しているすみちゃん、動かせる範囲が約10センチ四方の手で、ペンを握り、紙を動かしてもらいながら、唯一無二の、珠玉のカットを描いています。

毎週1回、編集会議を開き、編集部員全員で、次号のおたよりについて議論を重ねます。編集長と私は、毎月連載を持っています。なるべく多くの方に書き手になってもらいたいので、編集部員があちこち頼んでまわります。頼みっぱなしで連絡方法を聞いてなかったり、失敗の数々は枚挙に暇が

区画整理反対ニュース

「区画整理」は非民主的で、財産権等において憲法違反と言われている問題の事業です。しかし、複雑・難解な仕組みの上に、個人情報や理由に秘密裏に進める「闇の事業」のため、多くの住民が被害に遭っても、なかなか世論を動かす状況になりません。

羽村駅西口区画整理事業は、玉川上水羽村の堰に続く閑静な住宅地(42ヘクタール)の歴史的な道路や景観を破壊し、巨大な都市計画道路4本(最大幅40m)を中心に、ありふれた基盤の目の街(道路率30%)に造り変える計画です。「区画整理で土地の価値が上がるのだから」と、土地の無償提供をしなければならず、狭くて土地を出せない人等は、その分をお金(清算金)で支

りませんが、「おもしろかったよ」「楽しみにしています」「カットが良いね!」などの声を聞くと、嬉しさでいっぱいになります。

私たちの日々の活動を知ってもらい、障害者も同じ人間であることをわかってもらうこと。自分の書いたものを認めてもらう喜び。それらを糧に、編集長は今日も編集部員を叱咤激励し、パソコンの前で居眠りしながら、原稿に向き合っています。

(桑木なつみ)

払わなければなりません。

また、各宅地を基盤の目の街区に詰め込むため、殆どの家屋(約千軒)が移転となり、住民は2度の引越、仮住まい、家の建て替えを余儀なくされ、財産的にも精神的にも非常に負担の大きい事業です。

1996年アセスメント縦覧前、住民のガリ版刷りの「区画整理学習会のお知らせ」(「ニュース」第1号)がポストに入り、「区画整理を考える会」が発足しました。「住民の意見を聞いて」と市に署名を提出したところ、市は「区画整理は住民の合意が無くてもできる」と述べ、市主導で作られた「まちづくり委員会」の傍聴も拒否されたため、「考える会」は「羽村駅西口区画整理反対の会」に名称を変更、「区画整理断固反対」の看板を立てました。

98年の都市計画決定前には2度に及ぶ住民過半数の反対署名を提出。アセスや事業計画の縦覧には何千という意見書を出し、口頭陳述は2百人を越えたため、都の職員が羽村市まで聴き取りに来ました。しかし、署名は無視され、多く

の意見書や口頭陳述も聞き置くのみで全て不採択。そして15年6月、原告121人で2度目の裁判に入りました。

理不尽極まりない事業への怒りと美しく個性的な故郷を守りたい一心から、住民の闘いは22年、「ニュース」は233号を数え、地域には100枚ほどの抗議の看板が立っています。「ニュース」は、市議会や住民の方々から寄せられた沢山の情報や意見を基に、編集委員と世話人、約10名で作られ、地区委員が皆さんに届けています。区画整理は難解なため、見出しにも工夫が必要です。「こんな見出しで誰が読むか!」「スポーツ新聞の見出しを参考に!」等々、熱い議論で、完成するまでに本が1冊できるほど書き直されていきます。約1600枚刷り、区域全戸と地区外権者、そして市長を始め各課、報道機関へ届けています。これからも、みんなでおかしいことはおかしいと、いろいろな形で発信を続けていきます。HPも是非ご覧ください。(神屋敷和子)

区画整理反対ニュース 山一 別冊1
発行 発行 発行

6月市議会報告
議会でも、見直しの声あいつく
(議決工費なら70年間、免了、平成100年)

山崎議員「羽村駅西口区画整理事業の工事完了時期は、何時か?」
市長「施行期間を平成27年度から30年度とし、工事完了を平成56年と見据えている。編入1期延期と、編入2期(10年)を必要と見据えている。10年を、まずは一つの目標期間として考え、弾力的に見直しを行いながら事業推進を図っていく事が当市の考え方を示した。」
期間をどのように示したら関係者や市民の理解を得ることができるかを考えながら、編入延期を調整して行きたい。」
山崎議員「将来的に交付された全体の事業計画が完成されていない。現時点で30年後完結予定と書かれても、また将来的に交付される可能性があるのではないかと?」
水野議員「地権者の年齢別人数は?」
市長「70歳代が7人、80歳代が23人、40歳代が120人、50歳代198人、60歳代275人、70歳代379人、80歳代141人、90歳代58人。」
水野議員「今後30年の事業の責任を誰がとると考えているか?」
市長「市の事業計画を決定したことから事業継続、継続は即行である羽村市の責任。」

住民の合意を得るべき!

次野「駅前広場と4・12号線にしまつて居る合意に賛成し、財政や地権者の負担軽減を確保し、その他については従来の責任を明確にすべき。」
山崎議員「期間短縮のため、継続エリアとそれ以外の手段エリアに分けてはどうか?」
市長「今後8区画整理を基軸とした手法により、引き続き事業の促進を図る考え。」
山崎議員「前期あたりから、後30年と本来は50年、70年以上という話しが出てきた。これから先、何十年かかっても最終計画のままで完成させて行く方針には疑問がある。1000人の地権者のうち、今後30年、地権者数が増え続けるか?」
市長「事業の進捗をめぐって市民がどうも心配している。」
山崎議員「今後30年の事業の責任を誰がとると考えているか?」
市長「市の事業計画を決定したことから事業継続、継続は即行である羽村市の責任。」

・創刊 1996年、1600部、A4判、2頁、モノクロ、年5〜7回不定期発行
・連絡先 tel:090-2469-1885
<https://hamurajimdo.com/>
・当館所蔵：122-233 (欠号あり)
▽233号内容=6月市議会報告「議会でも、見直しの声あいつく」、住民の合意を得るべき!、集団移転工法が住民の生活を破壊する、不都合な情報も全て出して権利者の判断を、他。

八王子平和・原爆資料館

原爆の「実感」から戦争と平和の意味を考える場

7月には国連で「核兵器禁止条約」が採択され、つい先日は、国際NGOネットワーク「核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN＝アイキャン）」に今年のノーベル平和賞が授与されるのが決まり、被爆者たちの喜びの声も伝えられている。その一方で、2月に作家の林京子さん、3月に医師の肥田舜太郎さん、8月には被爆者運動を牽引してきた長崎の谷口稜暉さん、そして、広島・原爆供養塔の佐伯敏子さん…。たくさんさんの被爆者の計報が続いている。無理もない、と言われればそれまでなのだが、被爆者の平均年齢は2017年3月末の厚労省統計によると、81・41歳である。

◇「被爆者」とは？

ところで、「被爆者」とはどんな人のことなのか？ と聞かれて、「原爆に遭った人のことですよ」というのが多くの人の答えではないだろうか？
だが、そうではないのだ。「被爆者」＝被爆者健康手帳所持者と呼ばれる人たちは、法的には次の4つに分類され

ている。

○1号・直接被爆者＝原爆に直接遭った人。現在その数10万2346人。

○2号・入市被爆者＝原爆投下以降の2週間以内に市内に入った人。3万6962人。

○3号・救済活動従事者＝救済活動にあたった人。1万8158人。

○4号・胎内被爆者＝当時母親のお腹で翌年初めまでに生まれた人。7155人。

全国で合計16万4621人。差別などの問題もあって、手帳を取得してしない人々もいるから、実際の数はもっと多いはずだ。

◇原爆という爆弾の恐ろしさ

「普通の」爆弾なら、爆発のその場においてお終いということ



とになるのだが、2号以降の「被爆者」の定義をもう一度読み直してほしい。現場にいらなくても、肉親などを捜しに市内に入ったというだけで「被爆者になる」のだ。そして究極とも言えるのが胎内被爆者の存在である。原爆の時、母親の胎内にいた胎児が放射線を浴びねばならない理由はどこにあるのか？ こんな爆弾は他にない。原爆で死んだ広島・長崎の何十万人の人々（国連に報告のデータとしてよく引用される死者数は、45年末までに広島で14万人±1万人、長崎で7・4万人±1万人）は、ただただ戦争中の出来事で「運が悪かった」というのか？

◇被爆者の資料寄託から

市役所のすぐ横にある「八王子平和・原爆資料館」は、市内に住んでいた被爆者の資料寄託をきっかけに開設された。今年で20年目を迎え、さまざまな活動を続けているのだが、八王子の市民でもその存在を知る人は少ない。だが、現在所蔵



されている書籍はおよそ2千冊を越えて、広島市の平和記念資料館から訪れた学芸員も、「これは広島にもないなあ」と言うような貴重な資料も所蔵されている。書籍の他、被爆瓦や溶けた皿などの遺物も常時展示されている。

◇豊嶋長生くんの上着とスポン

一番と言ってもいい貴重な資料は、原爆当時、建物疎開の作業中に被爆し、亡くなった中学生の着ていた血染めの上着とスポンである。広島二中の

豊嶋長生くんは、捜しに来たお母さんと奇跡的に遭遇し、郊外の家まで運ばれ、「君が代」を歌いながら死んでいった。切り裂かれ、血がにじんだままの服は、お母さんの無念と嘆きを無言で伝えている。平和を願う各地のイベントにも無料で貸し出されるこの服は、都内で多分唯一ではないだろうか。

◇「物語」に出会い、思いを馳せる

館名に「原爆」という言葉を掲げ、市民たち有志に支えられて運営されている資料館は、こと、札幌にある「広島・長崎原爆資料展示館」以外はあまり聞かない。ご多分にもれず、金銭的にも、そして支える人たちの高齢化などの問題もあって、今後の維持をめぐって課題は山積している。

私たちはともすれば、原爆について「知っているつもり」で終わってはいないだろうか？ 1945年8月6日・9日という日付だけにとどまらない「実感」を、この資料館を訪ねることでぜひ受け取ってもらいた。そして原爆で亡くなった多くの人々に思いを馳せ、戦争と平和の意味を考える「物語」に出会ってほしいと思う。

（竹内良男＝八王子平和・原爆資料館運営委員、市民アーカイブ多摩資料寄贈者）

八王子平和・原爆資料館

・所在地：東京都八王子市元本郷町 3-17-5 ハマナカビル2F
・tel・fax：042-627-5271
・アクセス：西八王子駅徒歩15分、バスもあり（八王子市役所入口下車）
・開館曜日：毎週水・金曜日
・開館時間：10時～16時・入館無料
<http://hachiojiheiheiwagennbaku.web.fc2.com/>
※開館曜日以外も事前連絡があれば対応可能。ご連絡ください。

市民アーカイブ多摩の資料棚から 7

〈平和〉①

「平和」をテーマを含む活動は広範囲にわたるので、当館のミニコミ分類番号20の「平和」に何を入れるかは難しい問題の1つである。当館の分類番号13（憲法）や26（基地）、29（十五年戦争）のミニコミもテーマの1つとして「反戦」や「平和」を含む。原子力の問題も原水爆禁止運動等を通じて「平和」と繋がっている。

ここでは当館の分類番号20に含まれるミニコミに絞っていくつか紹介したい。「平和」の分類には大きく分けて、①社会運動団体が発行するミニコミ、②平和資料館・博物館が発行するミニコミの2つに分けられる。今回は①について紹介する。

【全国的に活動を展開】

幅広い地域で活動する団体のミニコミの中で、創刊が恐らく一番古いのが『平和新聞』である。発行元の日本平和委員会の結成は1950年（結成時の名称は「平和擁護日本委員会」）で、『平和新聞』は52年創刊（『講和新聞』を改称）。2007年7月〜08年3月刊行号を所蔵。有名団体のミニコミとして

は『AMP O areport from the Japanese new left』（ベトナムに平和を！市民連合）も所蔵している。タイトルを聞いて懐かしさを覚える方がいらっしやるかもしれない。69年発行の1号から7・8号合併号を所蔵（6号欠）。関連資料として閲覧室の隅にある書棚に『週刊アンポ』（0〜12号）の合冊本があるので、あわせて閲覧していただきたい。

以下のミニコミはまとまった号数を所蔵している。『百万人署名運動全国通信』は、「9条変えるな！派兵恒久法反対！」百万人署名を始めたとした署名運動や各種集会を開催している「とめよう戦争への道！百万人署名運動が発行元で、各地の運動の様子も取り上げられている。102号（06年5月）以降を所蔵。『ピースネットニュース』は平和運動や環境問題・人権問題などの市民運動や被災者支援、市民平和基金の創設を行う「ピースネット・市民平和基金」が発行していたミニコミ。創刊準備1号（88年2月）から最終号の235号（08年4月）を所蔵。『怒りの大集会 報告集』は、「戦争を許さない市民の会」などが主催して憲法や平和、原発の問題を議論するために年に数回開催する集会の記録集である。04年以降の報告集に加え、チラシ等を集めたファイルを別冊で所蔵。『国民学校一年生の会ニュース』は99年に創立、17年5月に解散した「国民学校一年生の会」のミニコミである。同会はこの国



題を議論するために年に数回開催する集会の記録集である。04年以降の報告集に加え、チラシ等を集めたファイルを別冊で所蔵。『国民学校一年生の会ニュース』は99年に創立、17年5月に解散した「国民学校一年生の会」のミニコミである。同会はこの国

【地域で活動する団体】

続いて特定地域で活動する団体の資料をいくつか紹介したい。労働組合発行のミニコミとしては、『かながわ平和通信』（神奈川県高教組平和運動推進委員会）がある。179号の編集後記で編集長が、「組合は賃上げ、職場環境改善をすればいい。平和運動に組合員の金を使うな」という批判があったことを、労働組合が平和運動を行う難しさの例として挙げたのが印象的である。138号（03年2月）以降を現在進行形で所蔵。

今も基地問題で揺れる沖縄の資料としては、『新月新聞』がある。沖縄本島北部にある160人程の集落、高江の人々（女性たち）が「お手紙のようなおしゃべりのようなもの」（6号）「はじめに」を指して作るミニコミである。高江では米軍北部訓練場の一部返還と引換に建設されるヘリパッドへの反対運動が関わっており、新聞には高江の近況や、やんばるの森での暮らしなどが書かれている。2〜8号（13年11月〜15年2月）を所蔵。

（03年〜05年）の資料で、昭和天皇の戦争責任問題も含めて、天皇制の問題と平和の問題が交差する場で発生した運動の記録である。「つぶせ！派兵国家の昭和天皇記念館」春季行動実行委員会発行の『潰天通信』（1号、2号）と『阻止団News』（4号〜16号（最終号））を所蔵。

他に、本紙8号で紹介した『テント村通信』の分類番号も20である。ミニコミではないが、04年7月に非戦・平和を基本とするまちづくりを進めるべく発足し、学習会を行う「非戦のまち・くにたちの会」（東京都国立市）の資料もある。10年までのピラや学習会の資料を所蔵。

この他、ファイルにはなっていない（収集号数が少ない）ミニコミや、チラシなどを別途収集している。

今回は社会運動団体が発行するミニコミのみ紹介した。当初は本号で完結の予定だったが、ミニコミ発行団体の多様性（歴史、担い手、地域など）やその奥深さに影響され、2号連続という形になった。書棚の資料を手に取り、「平和」運動が戦後から現在まで70年以上連続と続けられている活動であることを改めて感じた次第である。

（長島祐基）一橋大学大学院、会員、資料整理ボランティア

アーカイブ多摩 13

◆資料整備が少しずつ進む

7月7・8回の開館日より、実際に資料整理が進んでいます。これまででは入力・配架作業だけで精一杯だったのが、分類の再考やファイル変更、新規収集など、少しずつですが、よりよい資料整備に着手しています。

先月には発行者の方が、ご自身で発行する通信の確認に来てくださり、欠号を埋めていただきました。感謝。

◆長期計画をたてる

今年度の大きな事業の柱は、「組織基盤の強化」。そしてもう1つ、新たに加えた事業が「長期計画に着手」すること。会員の方からの「将来のことを考えると、募金活動が必要なのは」というご意見がきっかけで、日常の開館業務に精一杯だった運

営委員は、はっと気づかされた。法人格取得の検討など組織基盤を強化しながら、長期計画に着手していきます。引き続き、皆さまからのご意見やアイデアを募集しています。

◆12月3日は、樹林開放日

前号で当会に「市民アーカイブ多摩」の建物を提供して下さっていた岸中友子さんが逝去されたことを書きました。岸中さんの遺志により樹林地・建物は、NPO法人グリーンサンクチュアリ悠(以下、GS悠)に遺贈されました。そして、これまで通り、GS悠から当会に建物を提供して下さるようになりました。

GS悠では春と秋に樹林開放日を開催しています。武蔵野の面影残る樹林地の見事な紅葉に癒されます。市民アーカイブも敷地内にありますので、ぜひ足をお運びください。12月3日(日) 10〜12時(荒天中止)。

運営委員会など

7月21日 第4回運営委員会。参加者8人。会員・カンパ者、当番確認、利用者報告(毎回)。定期総会・記念講演会感想と反省。緑蔭トーク②役割分担、運営委員会内部分類検討他。

7月22日 第3期緑蔭トーク②開催。参加者14人。

8月18日 第5回運営委員会。参加者6人。「アーカイブ通信」10号反省、11号企画、会員募集チラシ、緑蔭トーク③・特別編、17年度未着手事業整理、40・50番代分類、各部会から他。

9月12日 横浜新貨物線運動の事前学習会。参加者6人。

9月15日 第6回運営委員会。参加者7人。グリーンサンクチュアリ悠と建物貸借にかかわる覚え書き検討、横浜新貨物線運動学習会報告、事業計画、40・50番代分類、シリーズ「現場」を訪ねる検討他。

9月23日 第3期緑蔭トーク③開催。参加者17人。

※運営委員会は毎月第3金曜日19〜21時。正会員の皆様の参加を歓迎しています。

会員数(2017・10・15)

- ・141人(正会員59、賛助会員82)
- ◆新規入会ありがとつ
- ・正会員II佐野元信さん
- ・賛助会員II金子正嗣さん

会員の皆さまから

多摩地域の自治体史にかかわることになったが、戦後70余年の市民のさまざまな運動や文化活動にかかわる資料は、行政側の施設に部分的にしか残されていないこともあって、最終的には新聞資料の地域版に頼らざるを得ない現状がある。その新聞資料引用については、歴史的事実の実証を求められる場合があり、限界がある。市民活動資料とともに、その当時、新聞はどのように報道していたか同時に知ることができると、いいのではないかと思っている。

地道な活動を着実に一步一步進めていってくださいますよう、お願いいたします。

大正期に成立した日本の社会事業が「社会連帯」をキーワードとしていたことに、いま一度学び直す必要があるのでは、と思うこのごろです。

カンパありがとう

7月1日〜9月30日
澤西義博さん、瀬川理恵さん、西野敏子さん、山田征さん、こがねい女性ネットワーク

編集後記

開館以来、年3回発行してきた「アーカイブ通信」7・11・3月の冒頭を発行日として着々と進行してきましたが、今年度は講演会や緑蔭トークなどの主催イベントの日程が微妙で進行に苦心しています。限られた時間でお礼申し上げます。濃密な作業の成果をご高覧ください。ご感想など、お待ちしています。(湯・増・江・鈴)

市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時〜4時 ・入館カンパ：100円〜
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7
(多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南側徒歩8分)
- ・tel・fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1600タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp

